

ハイフン語の使用について

—歴史的考察と今後の動向 その2—

野原 康弘

はじめに

まず次の語から始めてみたいと思う。

LLANFAIRPWLLGWYNGYLLGOGERYCHWYRNDROBWLLLLANTYSILIOGOGOGOCH

これはウェールズ語 (Welsh) の地名であり駅名でもある。これは1語で表現されているが、英語の訳をみると数多くの語が結合した複合語であることが分かる。

‘St. Mary’s Church in the hollow of white hazel near a rapid whirlpool and the Church of St. Tysilio near the red cave’

文字数だけみると58文字ある。確かに地名としてはニュージーランドのものが長い (92文字) が駅名としてはウェールズのものが世界一長い語といえるだろう¹。

今でもウェールズでは上記の例ほどではないが比較的長い地名がみられる。

Rhosllanerchrugog

Penrhyndeudraeth

ここでは語と語の空間はもちろん、ハイフン (hyphen) さえも使用されていないので、ウェールズ語に精通していなければ読むことさえ困難な地名である。

一方、英語においてはどうかであろうか。最初の例ほど長いものは存在しないがそれでも比較的長い語は存在する。文字数は29文字。

floccinaucinilipilification : 'no value' (Webster, p. 735.)

次は34文字で、上の語より少し長い。

supercalifragilisticexpialidocious (Webster, p. 1907.)

この語はそれまですでに存在していた歌のタイトルが Walt Disney の映画作品 'Mary Poppins' で使用され、一躍有名になった語である。しかしこれよりもさらに長い1語が辞書にはある。

pneumonoultramicroscopicsilicovolcanokoniosis (Webster, p. 1491.)

この語は「けい性肺塵病 (石英などの非常に細かい粉末を吸い込んで起こる病気)」、炭鉱夫などに多いといわれている病名である。文字数は45文字もあるがハイフンは使用されていない。

ハイフンの役割

例えば、比較的長い英語の地名を次のように表記したらどうであろうか。

NEWCASTLEUPONTYNE

EYTONUPONTHEWEALDMOOR

STRATFORDUPONAVON

ハイフン語の使用について

BARTONUNDERNEEDWOOD

SUTTONUNDERWHITESTONECLIFFE

幸いなことに英語の長い地名などには、語と語の間に1文字分の空間やハイフンがあるのが普通で、実際には以下に示した例のように表記されるので、はるかに読みやすく分かりやすくなっている。

NEWCASTLE UPON TYNE

EYTON UPON THE WEALD MOOR

STRATFORD-UPON-AVON

BARTON-UNDER-NEEDWOOD

SUTTON-UNDER-WHITESTONECLIFFE

このような例は、最初の空間やハイフン無しの例よりずっと読みやすくなっている。さらに二つの例（語と語の間に空間を持つもの）よりもハイフンを付加した後の三つの例の方が「1語としてのまとまり感」が強い印象を与える。ハイフンの使用がいかにかに有意義であるかを改めて痛感する。

ハイフン語の歴史的考察

各時代においてハイフンの使用の状態や時代ごとの比較を試みるためにそれぞれの時代を代表する作品を取り上げてみた。（ ）の数字は発表年を示す。

- ① G. Chaucer (I) : *The Book of the Duchess* (1369) : Robinson 版
- ② G. Chaucer (II) : *The Canterbury Tales* (1387) : Robinson 版
- ③ G. Chaucer (II) : *The Canterbury Tales* (1387) : Ellesmere 写本
- ④ T. Malory : *Le Morte D'Arthur* (1485)
- ⑤ W. Shakespeare (I) : *Richard III* (1590) : オリジナルに基づく版

- ⑥ W. Shakespeare (II) : *Richard III* (1590)
- ⑦ King James I: *The Authorized Version of the Bible* (1611)
- ⑧ J. Milton: *Paradise Lost* (1671)
- ⑨ D. Defoe: *Robinson Crusoe* (1719)
- ⑩ W. Wordsworth: *Selected Poems* (1805)
- ⑪ J. Austen: *Pride and Prejudice* (1811)
- ⑫ L. Carroll (I) : *Alice's Adventures in Wonderland* (1865)
- ⑬ L. Carroll (II) : *Through the Looking-Glass* (1871)
- ⑭ J. London: *The Call of the Wild* (1906)
- ⑮ J. Conrad: *Heart of Darkness* (1907)
- ⑯ E. Hemingway: *The Sun Also Rises* (1926)
- ⑰ A. A. Milne: *Winnie-the-Pooh* (1926)
- ⑱ G. Mikes: *How to be a Brit* (1986)
- ⑲ D. Dahl (I) : *The BFG* (1982)
- ⑳ D. Dahl (II) : *Matilda* (1988)
- ㉑ S. Sheldon: *Master of the Game* (1983)
- ㉒ J. Grisham: *The Rainmaker* (1995)
- ㉓ J. Archer: *A Prison Diary* (2003)
- ㉔ J. K. Rowling (VII) : *Harry Potter and the Deathly Hallows* (2007)
- ㉕ J. K. Rowling (VI) : *Harry Potter and the Half-Blood Prince* (2005)
- ㉖ J. K. Rowling (V) : *Harry Potter and the Order of the Phoenix* (2003)
- ㉗ J. K. Rowling (IV) : *Harry Potter and the Goblet of Fire* (2000)
- ㉘ J. K. Rowling (III) : *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* (1999)
- ㉙ J. K. Rowling (II) : *Harry Potter and the Chamber of Secrets* (1998)
- ㉚ J. K. Rowling (I) : *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (1997)

実 例 検 証

上記の①～④までの作品を見る限り、確かにハイフン語は登場している。

ハイフン語の使用について

Chaucer (I) においても

Soone, or wite **wher-so** he be, (p. 355)

Chaucer (II) においても

To **Caunterbury-ward**, I mene it so, (p. 793)

Malory においても

..., because we wait always on these **foot-men**, ... (p. 30.)

Shakespeare (I) においても

Poor **key-cold** Figure of a holy King, (I. 2. 5.)

しかし、Shakespeare の作品におけるハイフンの使用について、Franz (pp. 350-351) は「形容詞と形容詞は、形容詞と分詞同様にしばしば一種の複合語になり、近來のシェークスピア版本では普通ハイフンであらわされている。」と主張している。

実際、両者（ここでは⑥と⑤）を比較してみると、確かに近代版⑥ではハイフンになってはいるが、オリジナルに基づいた版⑤ではハイフン無しのところもある。例えば、*Richard III* の V. 3-242 をみると近代版⑥ではハイフンが使用されている。

Like **high-rear'd** bulwarks, stand before our faces;

しかし、オリジナルに基づく版⑤ではハイフン無しである。

Like **high rear'd** Bulwarks, stand before our Faces;

このことは Shakespeare よりも約200年前に書かれた Chaucer の作品においても当然言えることである。②の作品について Robinson 版でハイフンが使用されている同じ箇所をすべて③の「Ellesmere 写本」で調べてみるとハイフンはまったく使用されていない。確かに、写本という手書きのため r

で終わる語、例えば over がその後続く語 lippe との間にハイフンが付加されているかのように見れないこともない。

His **over lippe** wiped she so clene

—— ‘General Prologe’, l.133.

しかし、写本のその部分を拡大してみるとよく分かるのだが、これはあくまで r という文字のハネであり、ハイフンではない。

15世紀の Malory に関しては、この出版からのものには夥しい数のハイフン語が登場してくるが、彼の場合も Shakespeare と同じようなことが言えるのではないだろうか。

次に1611年に出版された *The Authorized Version of the Bible*（ここでは *The Holy Bible Containing The Old And New Testaments In The Authorized King James Version* を使用）においてハイフン語はまったくと言ってよいほど出てこない。見られるとすれば固有名詞、およびそれに近い表記の場合だけである。

And he erected there an altar, and called it **Elelohe-Israel**.

(‘Genesis, Ch. 33-20)

Be thou for the people to **God-ward**, that thou mayest bring the causes unto

God: (Genesis, Ch. 18-17)

A bundle of myrrh is my **well-beloved** unto me;

(‘The Song of Solomon’, Ch. 1-13)

And Jesus answered and said unto him, Blessed art thou, Simon **Bar-jona**:

(‘St. Matthew’, Ch. 16-17)

..., but also in every place your faith to **God-ward** is spread abroad;

(‘Thessalonians’, Ch. 1-8)

この聖書は約100年前の William Tyndale の聖書を基にして編纂させたと言

われているので、17世紀初頭の出版とはいえ、英語自体は16世紀初頭のものだと考えれば、ハイフンが使用されていないことも十分頷くことが出来る。

James I 世の時代に新大陸への植民が成功し、今まで目にしたこともないものがもたらされ、新語の形成や他言語からの借用が盛んに行われる。この時代以降、おおよそ Milton の時代あたりから徐々に語と語の結合にハイフンが使用される状況になり、ハイフン付加の新しい複合語が形成されていくわけである。

現在と違う用法

1) 「a+ハイフン語」

この型は Defoe ⑨には良く見られるし、Malory ④や Shakespeare ⑥のころから Carroll ⑫⑬や Austen ⑪さらに London ⑭にも登場する。

The meanwhile as this was **a-doing**, in came to King Mark, ...

——Malory, p. 54.

So long **a-growing** and so leisurely

——Shakespeare, II. 4-9.

The precedent was full as long **a-doing**;

——Ibid., III. 7-7.

It happened one time that, going **a-fishing** in a stark calm morning, ...

——Defoe, p. 24., p. 25., p. 86.

... which when they are set **a-going** by some object in view, ...

——Ibid., p. 185., p. 246.

... we should be able to deal well enough with the ten that were **a-coming**

——Ibid., p. 256., 262., 290

この型は Defoe にはまだまだ見られる。Austen, Carroll や London の例は以下に示す通りである。

“Well, yes, if you call that **a-dressing**,” the Queen said.

——Carroll (II), p. 172.

I saw an aged aged man,

A-sitting on a gate.

——Ibid., p. 215.

I had no notion but he would go **a-shooting**, ...

——Austen, p. 289.

Was just **a-wondering**’, that is all. It seemed a mite top-heavy.”

——London, p. 70.

楽曲の歌詞などではよく使用され、Bob Dylan も1964年に発表したレコードのタイトルと歌詞にこのようなハイフンを使用している。

The Times They Are **A-Changin**’

現在では意図的に古風な表現として使用する以外、使われることはまれである。

..., if something’s **a-creeping** around unseen ...

——Rowling (I), p. 199.

Chaucer (I) には、この形の元の形「on+～ing」が登場している。

How that they wolde **on-huntyng** goon, (1.355)

2) 「a+日付（年）」

このようにハイフンを使用するやり方は Austen や Conrad ⑮などにはよく登場している。

ハイフン語の使用について

..., and live to see many young of four thousand **a-year** come ...

——Austen, p. 6., p. 260., p. 268.

... (I heard the men in that lonely ship were dying of fever at the rate of three **a-day**) ...

——Conrad, p. 20.

It is funny what some people will do for a few francs **a-month**.

——Ibid., p. 21.

しかし現代英語ではハイフン無しの2語表記 (a year/a month/a day/a week など) が一般的である。

‘James says most people only get letters from home about once **a month**.’

‘We wrote to James three times **a week** last year.’

——Rowling (VII), p. 603.

I get paid once **a month**.

——*Longman Dictionary of Contemporary English*, p. 1.

これと同じようにある時期ハイフンが普通であったものが現在では逆に1語になってしまったものとして tomorrow, today, tonight などがある。

例えば, Malory や Shakespeare でもハイフン語が見られる。

We will be forward **to-morn**, said his host.

——Malory, p. 63.

And at Northampton they do rest **to-night**;

To-morrow or next day they will be here.

——Shakespeare, II.-4-2 & 3.

18世紀から19世紀の詩人 Wordsworth ⑩ではこれらの語はすべてハイフン

がまだ使用されている。

Though grief and pain may come **to-morrow**? (p. 111)

Such happiness as I have known **to-day**. (p. 140)

Ask him to lend his horse **to-night**, (p. 380)

19世紀初頭に書かれた Austen の作品でもハイフンが使用。19世紀中頃の Carroll の作品でも、さらに20世紀初頭の Hemingway の作品⑩でもまだハイフン語である。以下の3例は Hemingway の作品からである。

“**To-morrow**, if I get a good bull, I will try and show it to you.” (p. 178)

“You’re going to work **to-day**,” I said. (p. 92)

“I’ll bet you fifty pesetas they’re here **to-night**,” Bill said. (p. 101)

さすがに20世紀後半の作家たちなどにはハイフン語は見られないが、イギリスで執筆活動を行っている Mikes³ はハイフンをまだ使っている。

‘**To-morrow** it will be cold, cloudy and foggy; (p. 28)

現代英語における不統一

同じ語がハイフン語で、あるいは一語、あるいは2語で示されている。現代英語においても、表記の統一が見られないものが存在する。

1) 挨拶の語 (good-bye/good-by/goodbye)

Grisham ⑫はハイフン語の good-bye を何度も使用している (p. 189, p. 334, p. 350, p. 361, p. 368, p. 405, p. 459, p. 523)。

We say our **good-bye** as we backtrack and make a quick exit. (p. 179)

Sheldon もハイフン語を使用。

... Jamie said **good-bye** to Mrs. Jardine and set off. (p. 47)

Austen, Carroll, Conrad, Hemingway もさらに Milne ⑰もハイフン語を使用している。ただ、Hemingway は good-bye の他に good-by というハイフン語も使用している。

“Yes. She looked for you to say **good-bye**. (p. 227)

... , and Robert Cohn waved **good-by** to us, and all the Basques waved **good-by** to him. (p. 110)

それに対して、Archer ㉓はハイフン無しの1語 goodbye を使用している。

... , ‘I just wanted to say **goodbye**.’ (p. 250)

Dahl (I) ⑱では Archer と同じように1語 (goodbye) が、Dahl (II) ㉔ではハイフン語 (good-bye) が使われていて、Hemingway と同じように、作家により多少の混用が見られる。

他の挨拶語 (Good morning. Good afternoon. Good evening. Good night. Good day.) においてはほとんど2語が一般的であるように思われる。しかし、ここでも次のようなハイフン語の例が見られる。

“**Good-morning**, Christopher Robin,” he called out.

——Milne (I), p. 111.

... before he raised his arms to embrace his daughter **good-night**.

——Sheldon, p. 101.

その実態と問題点

ハイフン複合語の結合方法は、野原 (pp. 23-41) で提示しているように58通りがある。問題点はいくつか考えられる。

完全に同じ語の構成であるがハイフン語とハイフン無しの語句において意味の違うものが存在する。例えば以下のような語 (句) にそれが見られる。

bread and butter: ①「バターつきのパン」 ②「人の飯の種」

Would like some **bread and butter**? ①の例

Writing is my **bread and butter**. ②の例

さらにハイフンで結合 (bread-and-butter) されると「根本的な、最も重要な」意味の形容詞の働きを持つことにもなる。

a **bread-and-butter** job/the agency's **bread-and-butter** account

——Webster, p. 256.

しかし Carroll は、Carroll (I) においても Carroll (II) においてもハイフン語の bread-and-butter を①の意味で何度も使用している ((I): p. 105./ (II): p. 155, p. 172, p. 199, p. 200, p. 222.)。

...: so she helped herself to some tea and **bread-and-butter** ... (p. 74.)

もう一つ、同じようなパターンが見られるのが ham and egg と ham-and-egg である。「ハムエッグ」の意味の ham and egg は一般的に使用されているが、ハイフン語の ham-and-egg 「並の」は Longman の辞書にまだ掲載されていない。しかし Grisham には以下のようなハイフン複合語が見られる。

..., so when any **ham-and-egg** lawyer like Aubrey Long has a case in federal

court, he damned sure wants everyone to know. (p. 77.)

It's a natural rivalry, the little guys like my pal Rod here, the **ham-and-egg** street lawyers, ... (p. 80)

His lawyer is just another **ham-and-egger**, ... (p. 227)

「形容詞＋ハイフン＋過去分詞＋名詞」のパターン

形容詞のところに副詞の使用ではなく、古くから形容詞が使用されているし、現在でも使用されている。

..., and said unto him, Thou **new-made** knight, ...

——Malory, p. 79.

..., and had in a little time all my **new-discovered** estate safe about me ...

——Defoe, p. 295.

..., and there were no **new-fallen** snow with which to contend.

——London, p. 60.

To these **high-flown** expressions Elizabeth listened ...

——Austen, p. 94.

'We require five years' experience before we'll look at a paralegal. This is **high-powered** stuff.

——Grisham, p. 118.

問題点は二つ。一つは、過去分詞を修飾しているわけであるから前に置かれるものは、一般的に形容詞ではなくて副詞が当然である。

While these **newly-born** notions were passing in their heads, ...

——Austen, p. 199.

She is **highly-educated** woman.

——Longman, p. 767.

このように過去分詞の前が形容詞 high か、副詞 highly かの選択は困難である。おそらく「コロケーション (Collocation)」によるものであろう。Longman によれば、アメリカ英語では high-strung が、イギリス英語では highly strung が普通として、以下の例を挙げている。

a highly strung child (p. 767)

この例のようにハイフンを使わないものもある。あれほどハイフンを多用している Rowling (VII) さえ、以下のようなハイフン無しの表現も登場させている。

The lane was bordered on the left by wild, low-growing brambles, on the right by a high, **neatly manicured** hedge. (p. 9.)

... and pulled Harry into a hug that nearly cracked his **newly repaired** ribs. (p. 59.)

ハイフンの前の語が形容詞か副詞かの選択をしなければならない典型的なものは、「good+過去分詞」と「well+過去分詞」であろう。つぎにそれを考察していくことにする。

1) 「good+ハイフン+過去分詞」と「well+ハイフン+過去分詞」
まず形容詞の場合であるが以下の例をみてほしい。

good-hearted (Grisham, p. 158.)

good-humoured (Austen, p. 37., p. 200., p. 242., p. 253.)

good-natured (Carroll (I), p. 64./Carroll (II), p. 184. p. 233./

Rowling (IV), p. 49., p. 613./Rowling (VII), p. 92.)

good-tempered (Carroll, p. 225. /Austen, p. 190.)

以上の四つの例は Longman から取り出したもので good- のハイフン語は 4 例しか掲載されていない。しかしこれ以外にも Hemingway や Dahl には次のようなものが登場している。

good-sized (Hemingway, p. 124./Dahl (II), p. 186.)

一方, well- の方は Webster の辞書では, 「well+過去分詞」を特集して 800ほどの例を提示している。こちらのパターンはいろいろな作家に使用されていて, その数は計り知れないが代表的なものだけを参考に挙げてみよう。

well-built (Archer, p. 121)	well-dressed (Grisham, p. 428)
well-educated (Austen, p. 98)	well-grown (Austen, p. 37)
well-kept (Conrad, p. 105)	well-known (Wordsworth, p. 4)
well-ordered (Archer, p. 77)	well-paid (Longman, p. 1875)
well-practiced (Grisham, p. 361)	well-proportioned (Austen, p. 188)
well-spoken (Shakespeare I. 1-29)	well-stocked (Defoe, p. 192)
well-trained (Dahl (I), p. 190)	well-worn (Sheldon, p. 297)

この well- に関する複合語はハイフン語が圧倒的だが, 古くは 2 語である。

...but there came four knights **well armed**, ...

——Malory, p. 79.

⑦の聖書では以下のように, ハイフンは使われていない。

And Lot lifted up his eyes, and beheld all the plain of Jordan,
that it was **well watered** every where, ...

——‘Genesis’, chapter 13-10.

And Abraham was old, and **well stricken** in age;

——Ibid., chapter 24-1.

2) 「ハイフン+過去分詞+名詞」と「ハイフン+名詞+名詞」の比較

There's a thick, **legal-sized** envelope from the good folks ...

——Grisham, p. 319.

... at the side of the **swimming-pool-sized** bath

——Rowling (VI), p. 399.

I put on a **good-sized** sinker and dropped into the white water close ...

——Hemingway, p. 124.

It was not much bigger than a **good-sized** clothes cupboard ...

——Dahl (II), p. 186.

2007年の7月に出版されたばかりの *Harry Potter and the Deathly Hallows* (Rowling (VII)) では、-sized だけを使用。

... Moody was already pulling half a dozen **egg-cup-sized** glasses ... (p. 48)

..., as he accepted a **bucket-sized** glass of wine from Fred. (p. 102)

..., with a wave of a **dustbin-lid-sized** hand. (p. 102)

過去分詞 sized に対して名詞 size の例も存在する。

In the center of the room stood a large, **king-size** bed.

——Sheldon, p. 392.

おそらく作家によつての好みの違いがあると考えられる。

... amongst other necessities, an A4 pad and six **felt-tip** pen.

—Archer, p. 11.

‘With a **felt-tip** pen.’

—Ibid., p. 182.

Archer は tip という名詞を使用しているが、同じ表現で Grisham は過去分詞 tipped を使用している。

She wears a chic headset with a **felt-tipped** wire ...

—Grisham, p. 352.

さらに red-bricked に関しても、Grisham は過去分詞 bricked を使用しているが、ここでも Archer は名詞 brick を使用している。Rowling も brick を使用している。

The law offices are in a short, **red-bricked** strip shopping center ...

—Grisham, p. 153.

... before the van come to a halt in a courtyard surrounded by a thirty-foot **red-brick** wall, with razor wire looped along the top.

—Archer, p. 4.

... a large, old-fashioned, **red-brick** department store

—Rowling (VI), p. 426.

確かに Archer は、「名詞+名詞」の型を好んで使用していると言える。

You just stare at another **red-brick** block, ...

—Archer, p. 22

... unlike a **single-decker** bus, except that the windows are blacked out.

——Ibid., p. 4.

..., and once I've taken a long **press-button** shower, ...

——Ibid., p. 99.

しかし、好んで過去分詞を使っている Sheldon も

A noisy crowd had gathered around the **red-shirted** Irishman.

——Sheldon, p. 46., p. 47.

He had a sweaty, porcine face and the **red-veined** eyes, ...

——Ibid. p. 147.

時には名詞を使用している。

... and **red-marble** floor bordered with sienna-red marble.

——Sheldon, p. 232.

この点、London は過去分詞の使用を厳守している。

Buck lived at a big house in the **sun-kissed** Santa Clara Valley.

——London, p. 7.

“Now, you **red-eyed** devil,” he said, ...

——Ibid., p. 18.

... and turned over to a **black-faced** giant called Francois.

——Ibid., p. 22.

1 語とハイフン語の存在

この型の典型的なものが like を語尾に持つ語である。当然、①ハイフン語だけのものと②ハイフン語と1語の共存と③1語のみの3パターンが存在

する。

①ハイフン語のみ

..., he responded with **lightning-like** rapidity.

—London, p. 114.

ハイフンの前にはどのような語でも来ることができるので、このパターン①の語は無数にあることになる。面白い表現を造りだすのに便利である。Rowling はハイフンを駆使していろいろな表現を生み出している。

Goyle's boat-like shoes (II. P. 162)

whose ham-like hands (V. 17)

her horse-like teeth (IV. 29)

his pencil-like nose (V. p. 572)

②ハイフン語と 1 語の共存

... a great deal of effort about their manner, but no **business-like** method.

—London, p. 69.

'Is it Cho?' she asked in a **businesslike** way.

—Rowling (V), p. 404.

このパターン②は Rowling には数多く登場する。

bark-like laugh (V. 107) / barklike face (V. p. 233);

bat-like ears (V. p. 22) / batlike ears (V. p. 100);

claw-like hands (III. p. 266) / clawlike hand (V. p. 453);

lamp-like eyes (I. p. 199) / lamplike yellow eyes (V. p. 253);

snake-like cords (III. p. 263) / snakelike face (V. p. 435) etc.

このパターンの語は like 以外でも多く存在する。

From the camp the faint sound of many voices, rising and falling in a **sing-song** chant.

—London, p. 121.

‘Wit beyond measure is man’s greatest treasure,’ said Luna in a **sing-song** voice.

—Rowling (V), p. 169.

in a **singsong** voice

—Longman, p. 1541., Macquarie, p. 919.

ひとつ興味ある例が Longman に載せられている。ほとんど同じ語がハイフンがあるかないかでまったく逆の意味を表すというのである。それはハイフンを持たない **uh huh** は ‘yes’ を意味し、ハイフンのある **uh-uh** は ‘no’ を意味するという説明である。

③ 1 語のみ

, ... the scene was a **dreamlike** fantasy as the visitors ...

—Sheldon, p. 13.

Instead he seemed to slide, **dreamlike**, across two aisles and up a third.

—Rowling (V), p. 565.

辞書上で 1 語とすでに認められているものは少ないと思う。それでも Rowling は、dreamlike の他にハイフン無しでいろいろな語を使用している。

bricklike (V. p. 667) / hawklike (V. p. 192) / lionlike (VI. p. 43) / mudlike

(VI. p. 175)/onionlike (VI. p. 398)/peachlike (V. p. 697)/snoutlike (V. p. 100)/toadlike (V. p. 137)/twiglike (V. 233)/whiplike (VI. p. 564) etc.

Rowling が1語として多用しているこのような複合語は Longman などでは1語として掲載されていない。しかし、作家は自分独自の感覚でハイフンを自由に使用できるし、その使用を絶対的に規制するものも存在しない (Vallins, p. 183)。これが複合語の現状である。

アメリカ英語とイギリス英語における違い

アメリカ英語とイギリス英語において、ハイフンに関する違いが存在するのであろうか。アメリカの作家 Grisham や Sheldon, そしてイギリスの作家 Archer の作品を読んでいると違いを感じることもある。例えば、ジム関係の語で「上立て伏せ」は両語ともハイフンを使うが、アメリカ英語は push-up に対して、イギリス英語は press-up である。「腹筋運動」は同じ語を使用するが、アメリカ英語では、1語の situp であり、イギリス英語ではハイフンを使い sit-up となる。同じように、「ルームメイト」はアメリカ英語ではハイフンなしの1語 roommate (Grisham, p. 276) が普通であるのに対して、イギリス英語はハイフン付加の room-mate (Archer, p. 67) が一般的である。イギリス英語では別の語 flat-mate も存在するがこの語もハイフン付である。特別な語になるが「監房仲間」を Archer (p. 67) は cell-mate と表現している⁴。イギリス英語では「シャワールーム」は shower room (Archer, p. 14) と2語表記であるが、Longman には shower cubicle のみでこの語は記載されていない。このような複合語においても両国語間の違いは存在している。

ここでは、room が造る複合語にしぼってイギリス英語とアメリカ英語を詳しく比較してみたいと思う。

アメリカ英語

イギリス英語

- 1) (Longman, Webster とも掲載なし) assembly-room (Wordsworth, p. 224.)

この assembly-room 自体が古い語であるため他のイギリスの作家たちも使用していない。2語複合語が ABC NEWS⁵ には掲載されている。

... in the General **Assembly room**, which is usually off-limits to the public. ...
Dec. 23, 2005 | Charlotte Sector

- 2) ballroom (Sheldon, p. 13) ball-room (BBC)⁶

Longman では、ball の複合語として、1語の ballcock, ballgown, ball-player を、2語の ball bearing, ball boy/girl, ball game, ball park を、ハイフン語として ball-ups を掲載。

- 3) bathroom (Grisham, p. 212) bathroom (Rowling (VII), p. 19)

両国語とも1語のみ。ハイフン語 bath-room も2語複合語 bath room も存在しない。この bath 関係の他の複合語は、bathrobe, bathtub は1語、bath mat, bath towel は2語表記となっている (Longman, p. 110)。

- 4) bedroom (Sheldon, p. 16) bedroom (Rowling (VII), p. 19)

上記の bathroom 同様、bed-room も bed room も存在しない。

- 5) すべて掲載なし。 book-room (Austen, p. 131)

固有名詞 (例えば Sacramento Surplus Book Room) の掲載 (CNN)⁷。

- 6) bread-room (Hemingway, p. 53) イギリス英語の例もすべて掲載なし。

Longman には掲載なし。イギリス英語もなし。パンを保存する部屋で、本来は中世時代に使われた古い名称であるため。

Toilets and **waiting-room** are no longer disfigured by ‘white’ and ‘coloured’ signs. (BBC)

51) wine room (Agent in USA) BBC にも記載なし。

Longman には wine cellar のみ記載。ABC NEWS には掲載。

... , a conference **room**, a **wine room**, ... (Nov. 5, 2007) (ABC NEWS)

こうして比較してみると、アメリカ英語とイギリス英語の間にはハイフンの使用と不使用、そして1語複合語と2語複合語と、まったく統一がされていないことが一目瞭然である。

名詞と形容詞

上記の「アメリカ英語とイギリス英語」のところでは、その品詞の働きとハイフンの関係をあまり重要視せず、両者の違いにだけ注目してきた。もし品詞の違いによってハイフンを使用したり、使用せずに1語になったり、あるいは2語になったりするのであれば、何らかの統一性が存在することになる。果たしてどうであるのか、この点に少しだけ注目してみたい。

次の例は Rowling からの例である。

... every time he tried sitting down in the **living room** to watch television with his aunt and uncle.

——Rowling (V) , pp. 7-8.

Mr and Mrs Wealey were now sleeping in the **sitting room**, ...

——Rowling (VII), p. 93.

これらの例では両方の複合語とも名詞の機能を果たし2語で表記されている。同じ Rowling のハイフン語の例を見てほしい。

ハイフン語の使用について

... if his Uncle Vernon or Aunt Petunia stuck their heads out of the **living-room** window and looked straight down into the flowerbed below.

—Rowling (V), p. 7.

... if he had his nose pressed against their **sitting-room** window.

—Rowling (III), pp. 152-153.

この例での複合語は両方とも形容詞として機能している。おそらく Rowling の中では名詞の場合は 2 語複合語を使用し，形容詞の場合はハイフン複合語を使用するという使い分けがなされている¹⁰。実際，まったく同じような使い分けが ABC NEWS でもなされている。

2 語複合語は名詞に：

... in her comfortable **living room** with a new model TV at one end and a ...

Dec. 18, 2007 | Elaine Ganley Associated Press Writer

... Palace—her **sitting room**, her private dressing **room**, even the ...

Sep. 11, 2006 | Good Morning America

ハイフン語は形容詞的に：

... husband on a **living-room** couch. “We stayed up late that night and talked. ...

Nov. 22, 2007 | Larry Lage Ap Sports Writer

... sprawled on the **sitting-room** floor at my brother-in-law Peter Cosgrove’s

... Oct. 27, 2003

しかし，すべての作家がこのような使い分けをしているとは限らない。Dahl はハイフン語の dining-room を名詞でも形容詞でも使用している。

There was a large fireplace in the **dining-room** and she now set ...

—Dahl. (II), p. 43.

..., and all four of them crept towards the **dining-room** door, ...

—Ibid. (II), p. 45.

一方、2語の複合語（ここでは shower room を例に取る）の場合においても名詞としての使用は当然だが、ハイフン語ではなく2語複合語が形容詞としても名詞として使用されている例がある。

... handle of the shower room door at Bridgewater State Hospital Friday night ... , has a shower room with observational windows for officers, Wiffin said. ...

Mar. 31, 2007 (ABC NEWS)

さらに common-room が名詞で使用され common room が形容詞で使用されている。

These can often be found in youth clubs, leisure centre, common-rooms at school or even at home in the garage or basement. (25 Feb 2006) (BBC)
I would also like to know what kind of wine Marilyn had been drinking, was it “plonk” or something rather classy from the masters common room cellar? (BBC)

上の2つの例は BBC からのものであるが、最初の文ではハイフン語が名詞として使用され、次の文では2語の common room が形容詞として使用されている。

このように実際は、ハイフン語と2語複合語の機能性に関してすら、まったく統一が取れていないのが現状である。

ハイフン使用の便利さ

このように現段階ではあいまいに使用されているハイフンであるが、総合的な判断をすれば有益な方が多いと思われる。

ハイフン語の使用について

新製品が誕生し、命名する場合、既存の語をハイフンで繋ぐことによっていとも簡単に新しい名前が造りだされる。コンピュータ関係の語には e-mail や e-learning のようにハイフン語が多数見出される。今まで存在しなかった新しいものや架空のものを表現する場合もハイフン抜きでは考えられないほどである。

It was an enormous kitchen, with two large gas stoves, six ovens, three refrigerators and a **walk-in freezer**.

——Sheldon, p. 320.

Dobby the **house-elf** was standing beside the table on which Hermione had left half a dozen of her knitted hats.

——Rowling (V), p. 341.

しかしながら、ハイフンの一番の役割は何と言っても比較的長い表現を非常に簡潔なものに変えることができる点である。例えば本来、次のような文は

‘Tom Selleck before he became a star’

‘a movie in which Cary Grant and Audrey Hepburn starred’

ハイフンを使用すればそれぞれ以下のように非常に簡潔になる。

‘**pre-stardom** Tom Selleck’

——*TV Times*, 16-22 July 2005, p. 39.

‘a **Cary Grant-Audrey Hepburn** movie’

—Grisham, p. 238.

さらにハイフンの使用により 4 語, 5 語, さらには 6 語を連結することも問題なく可能である。

..., they don't reckon with the response of his mother, who wielded a bow and arrow.

上記の例文は 3 つのハイフンを使い, 4 語を連結することで簡潔な文になる。

..., they don't reckon with the response of his **bow-and-arrow-wielding** mother.

—*TV Times*, 23-29 October 2004, p. 48.

次の文章はどうだろうか。

They are watching a brand-new television, a present to welcome Dudley home for summer ...

この文もハイフンを 4 つ使用し, 5 語連結のハイフン語が誕生する。

They are watching a brand-new television, a **welcome-home-for-the-summer** present for Dudley.

—Rowling (III), p. 18.

もう一つだけ文を見てみよう。

Yet another chiller about a damsel who is in peril from a serial killer ...

この文はハイフンを5つ使い、6語連結ハイフン語を生み出す。

Yet another **damsel-in-peril-from-serial-killer** chiller,...

—*TV Times*, 20-26 Nov. 2004, p. 48.

これらの例をみて分かるように、ハイフンはいろいろな品詞を自由に結びつけることができる特殊な機能を持っているのである。

さらにハイフンの使用される数について制限はまったくないのである。例えば、grandfather や grandson に great がつく場合を考えてみよう。Great が一つ付加された場合：

My **great-grandson** will take over *Kruger-Brent Limited* one day.

—Sheldon, p. 14.

同じ Sheldon の同じ14ページに、great がさらにもう一つ付加された例を見出せる。確かに名詞は grandson ではなく grandfather になってはいるが³。

Robert was a replica of his **great-great-grandfather**.

Rowling (II) では、great が4つも付加された例がある。

..., you're his **great-great-great-great-grandson** or something ... (p. 147.)

語の付加だけでなく、単文がそのままハイフンで繋がれ全体として形容詞の働きをして名詞を修飾しているものもある。

Harry mentioned his **Malfoy-is-a-Death-Eater** theory.

—Rowling (VI), p. 242.

ハイフンを使用しなければ、以下のような文になるであろう。

Harry mentioned the theory that Malfoy was a Death Eater.

驚くことに、複文を構成するすべての語がハイフンで繋がれる場合もある。

‘Ron,’ said Hermione, in an **I-don’t-think-you’re-being-very-sensitive** sort of voice, ...

——Rowling (IV), p. 134.

この文もハイフンを使わなければ、次のように長ったらしい文になっていた
だろう。

‘Ron,’ said Hermione, in a sort of voice which suggested that she thought he
wasn’t being very sensitive.

さらに驚くことに、15もの語がハイフンで繋がれた重文さえ存在する。

The authors adopted an **I-can-laugh-at-it-now-but-it-was-no-laughing-
matter-at-the-time** attitude.

—— Theodore Bernstein (Venolia, p. 75)

この文もハイフンを使わなければ以下のような冗長な文になるはずである。

The authors adopted an attitude which suggested that they could laugh at
the matter now but that, at the time, it was no laughing matter.

さらに、ハイフンを使用すると否定表現が簡潔にできる。例えば、‘full of

old jokes that are not so trusty' という表現なら簡潔に下記のようなになる。

... full of **not-so-trusty** old jokes

—*TV Times*, (16-22 Oct. 2004)

この他に、否定の接頭辞 un- などは、独立語と結合して 1 語の複合語を形成するのが一般的である。

Wherever she went, she would be an **unmarried** woman with a child, ...

—Sheldon, p. 142.

確かに unmarried のように、馴染みのある語の場合は 1 語の複合語となるが、un- との結びつきが一般的でない語にはハイフンが使われる。

... for some grated cheese and two slices of **un-margarined** bread, ...

—Archer, pp. 48-49.

一番大きくて重要なハイフンの役割（この論文のその 1 でも触れたが）は、ハイフンない語のあいまいさをハイフンが付加されることによって取り除くことができる点である。

例えば、unionized という語は「組合化された」という意味と「イオン化されない」というまったく異なった意味を持つ。このままではどちらの意味であるかを判断する方法は文脈によるしかない。しかし、上の例のようにハイフンを用いて un-ionized とすることでこちらが「イオン化されない」という意味に限定することが出来る。

このようにハイフンを使用することにより、語のあいまいさが消失する例は多数みられ、Terban (pp. 64-65), Truss (pp. 168-172), Venolia (pp. 76-77) などもそのことを指摘し、ハイフンの意義を唱えている。

お わ り に

ここでもう一度ウェールズ語の例に戻りたいと思う。最近のウェールズの地図を調べてみると15文字ほどの地名はまだまだ見られるが、ハイフンを使用している地名も見られるようになってきている。

Llanfihangel-y-traethau	Cf. Llanfihangelytraethau
Llanfihangel-yng-Ngwynfa	Cf. LanfihangelynNgwynfa
Llansantffraid-ym-Mechain	Cf. LlansantffraidymMechain

このように合成語の元の語をそれぞれハイフンで繋ぐことにより読みやすく、かつ分かりやすくなる。このようなハイフンの使用は非常に効果的であり有意義である。

最初に例証したウェールズ語の駅名に戻るが、この駅名は「世界一長い駅名」を意識して、長いまま意図的に残されているようである。

LLANFAIRPWLLGWYNGYLLGOGERYCHWYRNDROBWL LLLANTYSILIOGOGOGOCH

この駅の正面には上記しか表示されていないが、駅構内のプラットフォームの駅名表示板にはウェールズ語の駅名の下に、次のようなハイフンが使用されたものが並列表示されている。

Llan-vire-pooll-guin-gill-go-ger-u-queern-drob-oll-llandus-ilio-gogo-goch

こうして見てくるとハイフンの乱用傾向があるのは確かであるが、それ以上にハイフンの便利さと有益さの方が目立っている。ハイフンで連結された複合語の中で常時使用されるものは、固定した表現として残って行く。いずれハイフン語の使用規制が真剣に議論されるであろうが、「発音とスペリング

の一致」への献身的な努力がまったく報われなかったように、ハイフンの使用に関するガイドラインはできて、厳格な規則性を見出せないまま、結局は使用者の裁量に任されることになるのではないだろうか。英語というのはそのような言語なのかも知れない。

注

1. 文字数だけみると58文字（51文字）ある。確かに地名としてはニュージーランドにある丘の名前（92文字）やタイの首都バンコクの正式名称は（162文字）がある。しかし駅名としてはウェールズのもの（世界一長い名前）といえる。
2. この「形容詞（high）＋過去分詞（rear'd）」は現代英語においては、後述することになるが、ハイフン使用が一般的である。
3. George Mikes はハンガリー人のジャーナリスト。ロンドンに派遣されて以来、生涯イギリスで暮らし、戦後、英語で書かれた多くの著書を残している。
4. Archer は cell-mate はハイフンを使用しているが、cell- の他の複合語では2語で表記している。

As soon as my cell door is closed, ... (p. 140)

5. ABC NEWS の例はその ON LINE NEWS からのもの。
6. BBC の例も bbc.com の ON LINE NEWS からのもの。
7. CNN の例も ON LINE NEWS からのもの。
8. Agent in UK はイギリスの不動産屋の宣伝広告からのもの。
9. Agent in USA はアメリカの不動産屋の宣伝広告からのもの。
10. Rowling の room のハイフン語を調べてみると形容詞として使用されている。
the common-room noticeboard (V), p. 200.
the drawing-room door (V), p. 96.
the staff-room door (III), p. 100.

参 考 文 献

- Araki, K & Yasui, M. 1992, *SANSEIDO'S New Dictionary of English Grammar*, Sanseido, Tokyo.
- Archer, J. 2002, *A Prison Diary* (Vol. 1. Hell), Pan Books, London.
- Austen, J. 1994, *Pride And Prejudice*, Penguin Books, London.
- Brewer, D. S. 1985. *Mr William Shakespeares Comedies, Histories and Tragedies*

- (Published According to the True Original Copies) The Moxon Press, London.
- Burchfield, R. W. Edited, 1986. *A Supplement to the Oxford English Dictionary*, Oxford University Press, London.
- Carroll, L. 2000, *Alice's Adventures in Wonderland & through the Looking-Glass*, Signet Classic Printing, New York.
- The Canterbury Tales (The Ellesmere Chaucer)* Huntington Library Press & Yushodo Co., Ltd.
- Conrad, J. 1973, *Heart of Darkness*, Penguin Books, London.
- Cooper, B. 2005, *Hannah Hyphen*, Gareth Stevens Publishing, Wisconsin.
- Dahl, D. 1984, *The BFG*, Puffin Books, New York.
- _____. 1988. *Matilda*, Puffin Books, London.
- Defoe, D. 1994, *Robinson Crusoe*, Penguin Books, London.
- Elliott, R. W. V. 1974. *Chaucer's English*, Andre Deutsch Limited, London.
- Grisham, J. 1995, *The Rainmaker*, Arrow Books, London.
- Hemingway, E. 2006, *The Sun Also Rises*, Scribner, New York.
- London, J. 1994. *The Call of the Wild*, Viking (Penguin Books), Harmondsworth.
- Longman Dictionary of Contemporary English*, 2005, Pearson Education Limited, Harlow, Essex
- Lederer, R. & Shore, J. 2005, *Comma Sense*, St. Martin's Press, New York
- 正村佳紀, 1992, 「オーストラリア新聞のハイフン語」, 京都外国語大学紀要『コスミカ』, 京都
- The Macquarie Dictionary*, 2003, The Macquarie Library Pty Ltd., Sydney, New South Wales
- Merriam-Webster's Guide to Punctuation and Style*, 2001, Merriam-Webster Inc., Springfield, Massachusetts.
- Mikes, G. 1986. *How To Be A Brit*, Penguin Books, London.
- Milne, A. A. 1992, *Winnie-the-Pooh*, A Puffin Books, New York.
- Milton, J. *Paradise Lost*, AEgyptan Press,
- 野原康弘, 2007, 「ハイフン語の使用について——歴史的考察と今後の動向 その1」『英米評論』桃山学院大学総合研究所, 大阪
- 大賀信孝, 2004, 『ハイフンについて考える』, 西日本法規出版, 東京
- The Oxford English Dictionary (O. E. D.)*, 1970. Oxford University Press, London.
- The Oxford English Dictionary, Second Edition on Compact Disc*, 1992. Oxford University

- Press, London.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J., 1974, *A Grammar of Contemporary English*, Longman Group Limited, London
- Random House Webster's Unabridged Dictionary*, 2003, Random House Difference, New York.
- _____, 2001, Random House, Inc., New York.
- Robinson, F. N., 1974, *The works of Geoffrey Chaucer*, Oxford University Press, Oxford.
- Rowling, J. R. 1997, *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, Bloomsbury, London.
- _____. 1998, *Harry Potter and the Chamber of Secrets*, Bloomsbury, London.
- _____. 1999, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, Bloomsbury, London.
- _____. 2000, *Harry Potter and the Goblet of Fire*, Bloomsbury, London.
- _____. 2003, *Harry Potter and the Order of the Phoenix*, Bloomsbury, London.
- _____. 2005, *Harry Potter and the Half-Blood Prince*, Bloomsbury, London.
- _____. 2007, *Harry Potter and The Deathly Hallows*, Bloomsbury, London.
- Semmelmeier, M. & Bolander, D. O., 1995, *The New Webster's Grammar Guide*, Berkley Books, New York.
- Shakespeare, W. 1990, *Richard III*, Taishukan Publishing Company, Tokyo.
- Sheldon, S. 2005, *Master of the Game*, Warner Books, New York.
- Stilman, A., 2004, *Grammatically Correct (An Essential Guide to Punctuation, Style, Usage & More)*, Writer's Digest Book, Cincinnati
- Straus, J. 2006, *The Blue Book of Grammar and Punctuation*, Mill Valley, California
- Strumpf, M. & Douglas, A., 2004, *The Grammar Bible*, Henry Holt and Company, LLC., New York.
- Strunk, W. Jr., & White, E. B., 2000, *The Elements of Style*, A Pearson Education Company, Needham Heights, Massachusetts
- Terban, M. 2002, *Punctuation Power*, Scolartic Inc., New York
- Truss, L. 2006. *Eats, Shoots & Leaves*, Gotham Books, New York
- TV Times*, October-December 2004, Ipmedia, London
- TV Times*, February-September 2005, Ipmedia, London
- Wordsworth, W. 1994, *William Wordsworth Selected Poems*, Everyman's Library, London.
- Vallins, G. H. (四方田 敏訳) 1987. *Better English*, 文化書房博文社, 東京
- Venolia, J. 2001, *Write Right*, Ten Speed Press, Toronto

Widespread Use of Hyphenated Compounds (Part 2)

NOHARA, Yasuhiro

The study in “Widespread Use of Hyphenated Compounds (Part 1)” was mostly concerned modern usage and discussed ① a short history of hyphens, ② varieties of hyphenated compounds, ③ two-word compounds & one-word compounds, ④ some rules about hyphenated compounds and ⑤ future tendency of hyphenated, two-word compounds and one-word compounds.

The main focus of Part 2 is a historical discussion of hyphenated compounds. It is generally believed that hyphenated compounds (**high-reared, well-dressed**, for example) inherently come from two-word ones (**high reared, well dressed** in Shakespeare’s age). An opposite movement, from one-word compounds to hyphenated ones, however, can also be found: “**today**” was derived from hyphenated “**to-day**”, while hyphenated “**a-month**”, common in 19th century, has not become one-word but is completely separated as “**a month**”.

We have also collected many examples of one-word compounds that coexist with hyphenated ones: **businesslike** and **business-like**, **lamplike** and **lamp-like**, **snakelike** and **snake-like**, and so on.

This study also refers to some differences between American English and British English usage regarding compounds.

Finally, this paper discusses why using hyphens is preferred by many writers.